

## 事業完了報告書

### 調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ～ 令和 7年 2月 17日
調査研究事項	<p>《委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究》</p> <p>I. 教育課程、教育環境整備に関すること</p> <p>②中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方 向けの日本語指導の在り方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夜間学級で初めて日本語指導を行う教員の日本語指導力養成カリキュラムの作成及び研究</li> <li>・夜間学級の教員が個別最適な日本語学習・指導計画を立てる力を身につけるための研究</li> <li>・日本語学習にて「個別最適な学び」「協働的な学び」を目指した、ICT機器を効果的に活用した教材及び指導の研究</li> </ul>
調査研究のねらい	<p><b>①夜間学級で初めて日本語指導を行う教員の日本語指導力の育成</b></p> <p>墨田区立文花中学校では外国籍の生徒が全体の9割を超え、日本語での学習が困難な生徒が増え、その国籍も多様になっている。そのような状況の中、教員の世代交代が進み、夜間学級に初めて配属される教員も増えており、日本語指導の経験がない教員の日本語指導力育成は喫緊の課題となっている。昨今、日本語指導のできる指導者が不足している現状は、全国の夜間中学校が抱えている課題である。</p> <p>本研究においては、日本語指導力の育成のために、法務省の定める日本語教育の資格を持つ教員を中心に、校内研修・OJTの仕組みを整理し、初めて日本語指導を行う教員の指導力のスキルアップを計画的に、そして組織的に行う方法を研究する。</p> <p><b>②夜間学級の教員が個別最適な日本語学習・指導計画を立てる力を身につけるための研究</b></p> <p>墨田区立文花中学校に通う日本語を母語としない生徒は、文化的言語的に多様な背景を持っている。また、本校を卒業後、高校進学をする生徒や日本で生活を続ける生徒が大半であり、このような状況が今後続くことが予想される。そのため、個に応じた日本語教育を行う必要がある。また、日本語指導をする教員がことばの発達と習得の段階について理解し、生徒の日本語習得を支援できる指導力を身につける必要がある。</p> <p>本研究では、教員が生徒一人ひとりに応じた日本語の学習・指導計画を立てられるようになるために、日本語教育の専門家を講師として招聘し、日本語指導力に関する研修・研究を実施する。</p>

	<p><b>③日本語学習にて「個別最適な学び」「協働的な学び」を取り入れたICT機器の活用</b></p> <p>文部科学省は、令和2年度より実施されている新学習指導要領を踏まえ学習者用デジタル教科書の普及を目指しているが、特別の教育課程による授業を実施している夜間学級においては学習者用デジタル教科書をそのまま使用することは難しい状況にある。また、日本語においてはデジタル教科書どころか、指定された教科書もない。その状況の中で、夜間学級の特別な教育課程に対応したデジタル教材の作成は現場の教員に委ねられているのが現状である。本研究においては、全国の夜間中学校に先駆け、より汎用性を重視した日本語学習用デジタル教材の作成、及びそのために必要な研究を行う。</p> <p>日本語指導におけるデジタル教材の活用は、教員の指導力や教材開発と繋がるため必要不可欠なものとなっている。GIGAスクール構想を念頭に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往復した授業デザインを行うための、ICT機器の活用を研究する。</p>
<p><b>調査研究の成果</b></p>	<p><b>①夜間学級で初めて日本語指導を行う教員の日本語指導力の育成</b></p> <p>今年度より、本校に勤務し、初めて日本語指導を行う教員5名（以下、新任教員とする）を対象に、次の取組を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>日本語指導力養成研修の実施</b></li> </ul> <p>昨年度の本研究で作成した日本語文法養成テキストを用い、教壇に立つ前に必要な日本語文法の基礎知識を身に付けることを目的として、日本語指導力養成研修を行った。これにより、新任教員が抱えていた日本語指導に対する不安が軽減され、難易度の高い文法項目についても事前に理解を深めることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>相互模擬授業と助言による指導力向上研修の実施</b></li> </ul> <p>新任教員同士が相互に模擬授業を行い、経験のある教員が助言を行う研修会を、2時間×8回実施した。この取組を通して、新任教員は自身の課題を客観的に把握し、指導力の改善につなげることができた。また、他の教員の授業を見ることで、自らの授業に取り入れられる点を学び、授業全体を見直す機会にもなった。</p> <p>日本語文法養成テキストや日本語指導力養成研修、さらに相互模擬授業は、指導者が確保できれば、どの学校でも同様に実施することが可能である。今後、本テキストおよび本取組について、東京都夜間中学校研究会の日本語班会などの場を通じて、広く共有・普及していきたい。</p> <p><b>②夜間学級の教員が個別最適な日本語学習・指導計画を立てる力を身につけるための研究</b></p>

本研究を通して、9割の専任教員が研修を通して自身の課題が解決したと感じていることがアンケート調査により、明らかになった。また、1月に実施した教員対象のインタビュー調査では日本語指導における課題が解決されたという意見が多数上がった。教員の所感として、「場面設定を説明してから、問題に取り組むといいというアドバイスを講師からもらった。実践してみたが、生徒の反応が良かった。」や、「語彙指導について悩んでいたが、教えていたQuizletを毎時間使って語彙指導するようになった。生徒も集中して取り組んでいる。」という回答を得た。これらの教員の所感から、指導の工夫に対する生徒の肯定的な反応が確認できる。このことは、教員が生徒の理解状況や日本語能力を適切に見取る力を身につけつつあることを示唆している。さらに、教員の「生徒を見取る力」が向上することで、生徒一人ひとりの実態に即した指導が可能となり、結果として生徒の日本語能力の向上が期待される。

また、日本語の授業で使用している教科書『大地1』『大地2』（スリーエーネットワーク）における新出語彙を課ごとに整理し、ICT学習教材であるQuizletを用いて新出語彙の導入および練習ができる環境を整備した。教員共通のアカウントを作成することで、全専任教員が同一の語彙教材を共有・活用できる体制を構築した。その結果、教員間で語彙指導の内容や進度にばらつきが生じにくくなり、計画的かつ継続的な語彙指導が可能となった。さらに、毎時間Quizletを活用して語彙学習を行うことで、生徒が集中して語彙学習に取り組む姿が見られるようになり、語彙学習に対する抵抗感の軽減や学習意欲の向上が確認された。

### ③日本語学習にて「個別最適な学び」「協働的な学び」を取り入れたICT機器の活用

今年度の研究では、ICT機器を活用した生徒の「個別最適な学び」と「協働的な学び」に向けてICT機器の利便性と携帯性の2点に着目して授業を実践した。学習課題は「①自動詞と他動詞のちがいの理解、②可能形の理解を深める」である。本校では、主に教科書『大地』に沿った文法教育をしている。今年度は実際に日本でよく使う日常の言葉やフレーズを活用し、理解を深めることを意識した。

①の自動詞と他動詞の学習では、生徒の混乱の防ぐため、まず他動詞の復習をした。そして、駅のアナウンスの「ドアが閉まります」というフレーズを聞き取らせ、違いを考えさせた。

#### 【成果】

1. 授業実践では視覚と音を同時に使うことで、生徒の理解が深まった
2. 文法事項の文字に写真やイラストの資格情報を追加することで、言葉を使う場面のイメージしやすくすることができ

	<p>た</p> <p>3. 練習問題を入れたこの教材をデータとして配布し、家庭学習や休み時間の復習に利用することができた</p> <p>②の可能形については、「できます」、「できません」の表現から、日常に関係ある場所やものを考えさせた。</p> <p><b>【成果】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生徒がモニターに映った問題を自ら読むことで主体的に学習に取り組むことができた</li> <li>2. 授業冒頭に行うことで学習の準備と本時の学習内容と関連させることができた</li> <li>3. 同時に生徒から教員側で設定した答えとはちがう言葉を引き出すことができ、語彙を増やすことにつながった</li> <li>4. 難しいと感じた生徒へもイラストなどの視覚情報、身近なものを問題にすることで、理解を助けることができた</li> </ol> <p>しかし、語彙力や文法事項を即座に定着させることはできないので、その他の学習支援アプリケーションを利用して語彙力を増やす実践をしたい。</p>
--	---